

感性、物づくり、物語 —共感の世界の広がりと繋がりを考える— (全 12 回)

第6回 共感とは何か

長島知正 (早稲田大学理工研招聘研究員)

前回までにとりあげた、感覚や感情は、基本的に「私」がある対象から受ける「感じ」のことでしたが、人の感じ方には「共感」と呼ばれる、そうした感じ方とは少し異なるが感じ方があります。ここでは、共感とはどういうことか、基本的な事柄をおさえたいと思います。

共感の現れ方の多様性

2020年の東京オリンピック招致が国に明るい空気をもたらしたことは多くのひとが認めるところでしょう。

「世界に共感される日本」になろう。

この標語は、招致のため、五輪招致委員会が使った標語です。この標語が果たして招致成功にどのくらい効いたのでしょうか。

ここではまず、「共感」と云う言葉は実際には現在どのように使われているのか、最近の新聞や雑誌、新書などのマスコミに現れた文言を、以下、幾つかランダムに取り上げてみます。

- 「今、共感できる服」：(女性月刊誌の広告。)
- 「彼女らの特徴は、メンバーは歌、ダンスはうまくないが、そうした若者が悩み、一生懸命努力する姿をリアルに見せること。このような姿に同じ世代の若者が共感を感じて支持することが成功の秘密だ」(新聞)
- 「この国の食事が、さらに貧しくなっていくようで、心配だ。工場で作られた弁当や惣菜を買ってきて食べる時代が加速していくことは、共感のない社会とどこかで直結しているような」：(新聞)
- 「Aさんの政治姿勢には共感できませんが、(中略)制度重視の発想につな

がるわけです」(新聞)

○「A 放送局の B 番組で紹介:共感が続々集まる感動作」(C 出版社の本の広告)

○サンリオのキャラクターは、単体でさほど人間くささを感じさせない。彼らもまた言葉を語る力を持つとはいえ、ディズニーキャラほど饒舌ではなく、感情表現もはるかに乏しい。それゆえ共感や同一化は容易ではなく、そのぶん彼らへの愛着は「感情移入」によって成立する。(齊藤環)

○「美食や好きなモノには全く惜しまない。そんな父親の生き方に共感していました」(新聞)

上で見るように、「共感」という言葉は、現代社会を切り出す一つのキーワードのように思われます。

まず手始めに、広辞苑で、共感の意味を調べておくことにします。

共感とは；(Sympathy の訳語)「他人の体験する感情や心的状態、あるいは主張を、自分が全く同じように感じたり理解したりすること」とあります。

このような要約は、共感の標準的な意味になっていると思います。とはいえ、上の広辞苑の説明に従ったとしても、他人が体験している状況や自分がある場は様々に考えられることから、共感の意味は相当多様性を持つようです。

例えば、私たちは何百年も前の外国の文学作品に共感したりします。こうしたことは、誰でも経験する日常的な出来事で、当然のように感じるかもしれません。しかし、立ち止まって考えてみると、国を越え、また時代を飛び超えて、ある作品や登場人物に共感することは非常に不思議なことではないでしょうか？こうした共感によって、私達は作品の登場人物の考えや感情を深く理解することが出来るようになる訳ですが、共感では、一体何が起きているのでしょうか。

以下で、こうした多様な共感を深く理解していくため、代表的な共感の在り方を取り上げて、少し立ち入って考えてみることにします。

共感の典型的な捉え方：ルソーとスミス

「共感」は相当広い意味で使われているため、現在、「共感」全体を要約する



ことは困難に思います。多様な共感について、見通せるようにするため、ここで、「共感」が社会的に影響を持つようになった一つの、しかし大きな契機に注目しましょう。

ある意味で今日の日本社会を決定づけたのは近代西欧です。その近代西欧の成立に決定的な影響を持った産業革命が起きたのは18世紀でした。私は、その時期、西欧はどのような社会状況にあって、人々はどのような関心を持っていたかを把握することは、我が国の明日のために、大きな手がかりを与えると考えています。

アダム・スミスおよびJ. J. ルソーは産業革命が始まろうとしていたその時期、それぞれ『道徳感情論』、『人間不平等起源論』を著しました。スミスの道徳感情論は其の後、『国富論』に発展され、彼は（自由主義）経済学の父と呼ばれる栄誉を担うことになります。また『不平等起源論』を著したルソーは其の後『社会契約論』を著して、フランス革命に影響を与えたと云われます。国籍も異なる著者によって著され、また別々の歩みを遂げたように見られるそれぞれの書物ですが、その基礎には実は大変よく似たものが置かれていました。

似ているのは、両者とも、人間社会を治める規則はどうあるべきかという問題を考え、更に、その規則を人間の本性から導くべきであるとしたことです。こうした人間誰しもが持つ基本的性質に基づいて、人間が集団として従うべき規則は「自然法」と呼ばれ、我々が実際目にする法律としての実定法 — その多くは人間の理性によって組み立てられている — の基礎と云われています。

ルソー：自己愛と憐れみの情

『人間不平等起源論』は1754年ルソー42歳の時、あるアカデミーの懸賞論文：「人間の不平等の起源は何か」のために構想し、提出された論文をもとに執筆されています。この中で、ルソーは人間の不平等の起源を解明するためには、人間そのものについて知らなければならないとし、自然が創造した人間本来の姿はどのようなものだったかから出発して、時の経過や事物の変化を通じて、人間本来の在り方に何が生じたのかを考えなければならないという。ルソーは人間には2種類の不平等、一つは人間の身体的不平等、もう一つは社会的な不平等があると考えます。彼は、前者の身体的不平等については自然に与えられ変えられないが、後者はある種の取りきめによって生まれるものであり、人々の同意により確立されるか、許可されるものだから、その源泉を解明することが意味ある事だと考えました。

ルソーの人間不平等起源論と後にフランス革命に影響した社会契約論の間は単純な繋がりとはなっていないので、軽々な推察は出来ませんが、彼の不平等起源の考察は、今日の平均的な学術論文などと比べ、ともかく圧倒的に人を引き付けます。それは、文化人類学で著名なレヴィ・ストロースがルソーを文化人類学の始祖と云わせたような、説得力に富み、魅力に溢れるものです。蛇足ですが、ルソーには様々な人間的なエピソードがあるようで、『純粹理性批判』を著した哲学者カントをして、ルソーに学ばなかったならば、自分は人の気持ちを知らない術学的で鼻持ちならぬ学者人生を送ることになったであろうといわしめた、どうにも計り知れない人物です。

本題に戻りましょう。彼は、不平等起源論において、理性に先立って人間の魂は、「自己愛と憐れみの情」という二つの原理に従って働くという人間像を立てました。つまり、ルソーは、

「第一の原理は、私達自らの幸福と自己保存への強い関心を持たせるものである。もう一つの原理は、感情を持つあらゆる存在、特に同類である他の人間たちが死んだり、苦しんだりするのを見ることに、自然な反感を覚えることである。

この二つの原理を調和させることによって、私達は、そこから自然法のすべ

てを導き出せる。ここに、必ずしも、社会性の原理を導入する必要はないのである。」

と云います。この第二の原理は、人は苦しんでいる他人を見ることに自然な反感を覚えるという、苦しむ他者に対する憐れみの感情あるいは同情は人間の本性であると云います。これは第一の原理が自己保存の欲求に関するのに対して、他者への関心・感情的関与を表すもので、一種の共感と考えられます。

スミス：同感（共感）

スミスの道徳感情論は1759年に、国富論は76年に出版されています。ルソーは『人間不平等起源論』の後に、『社会契約論』を著し、それがフランス革命の後ろ盾を与えたと云われます。スミスの道徳感情論の基本には、すぐ後で述べるように、ルソーの不平等起源論の第二の原理：憐れみの情と大変似た、人間の感情に重きをおいた思想があります。しかし、スミスは個人の利益追求が、見えざる（神の）手という市場調整作用により、国が豊かになるという自由主義経済としての『国富論』を著し、ルソーとは異なる歩みを遂げたように見えます。二人のその後の歩みの違いの経緯を明らかにすることは、きちんとした研究に任せねばなりません。こうしたスミスに影響を与えた人物に経験論者・懐疑論者として知られたヒュームがいたことは見逃せないように思われます。

道徳感情論の主たる目的は、社会秩序、つまり社会の構成する人たちが何らかの規則に従うことにより営まれる平和で安全な生活、を導く人間の本性は何かを明らかにすることでした。言い換えると、秩序だった社会では、私達は法を作り、それを守ることによって、その結果、安心して生活することが出来る。では、人間のどのような本性が、法を作らせ、それを守るのだろう、これが、スミスの道徳感情論において答えようとしたことです。彼の考えの基本は道徳感情論の冒頭にある次の文章に表されています：

「人間は、どんなに利己的なものと想定されうるにしても、明らかに人間の

本性の中には、何か別な原理があり、それによって、人間は他人の運・不運に関心を持ち、他人の幸福—それを見る喜びの他には何もひきおこさないにもかかわらず—自分にとって必要なものだと感じるものである。この種類に属するのは、憐れみまたは同情であり、それは、我々が他の人々の悲惨な様子を見たり、生々しく心に描いたりしたときに感じる情動である」

スミスは、利己的な感情の他に、こうした他者への関心に基づく感情（情動）を人間の本性の一つとして挙げていることから、ルソーとほとんど同じ原理を想定していることとなります。このような同じ型の「心の原理」がほぼ同時期に現れたことは、偶然かあるいは何か繋がりがあったかどうかは分かりませんが、大変興味ある事です。

スミスはこうした心の原理を出発点において、他人の感情や行為の適切性を判断する心の働きを「同感」(Sympathy) と呼びました。この同感を、スミス自身も共感と同じ意味と見做していますが、それは、他人の喜び、悲しみなどの感情を私の心に写し、想像力を使ってそれと同様な感情を引き出せるかを判断する（情感的な）能力です。

同感（共感）についてのさらに立ち入った解説は、拙書『感性的思考』を参考にいただければと思います。

※『感性的思考—理系・文系の壁を超える発想のために』（長島知正 著 東海大学出版会）